THE ANOTHER WORLD DEMON KING'S SUCCESSOR

異世界魔王の後継者 サクセサー I

Tetsunosuke Ichimura
市村鉄之助
Illustration 218

試し読み版

BEGINNING NOVELS

I

THE ANOTHER WORLD DEMON KING'S SUCCESSOR

STORY BY TETSUNOSUKE ICHIMURA & ILLUSTRATION BY NI-YA

† CONTENTS †

プロローグ
005

✣第一章✣ 喪失
016

✣第二章✣ 番いのお誘い
052

✣第三章✣ 堕天使
111

✣第四章✣ 女の覚悟
176

✣第五章✣ 先代魔王
260

エピローグ
287

✣書き下ろし✣ クラリッサとスクール水着
291

あとがき
308

キャラクターデザイン案
309

プロローグ

雷が雷音とともに降り注ぎ、拳が地面を砕き轟音を響かせる。

黒髪の少年――叶海麻人（かなみあさと）は魔力を体中に循環させて身体能力を向上させていく。細身の体から繰りだされた攻撃は、襲いかかる雷撃を弾き飛ばし石畳を破壊した。

「素晴らしい戦闘力だ。さすが勇者と呼ばれるだけあるね、異世界人！」

「俺を勇者って呼ぶんじゃねえ！」

巻き起こした風の魔術で飛びかかってくる石の破片を弾き飛ばしながら魔王が笑う。

魔王――リオネ・シュタインは腰まで届く闇色の髪を魔力でなびかせながら魔法陣を展開していく。

地面が隆起し、複数の槍となって麻人の体を貫かんと襲いかかる。強化した膂力（りょりょく）をもって石槍を砕きながらリオネに向かい距離を縮めていく。

意志を持つ蛇のように動く石槍に体を斬り裂かれながらすべてを破壊することに成功すると、地面を蹴って次の魔術を放とうとしている魔王に肉薄する。

拳がリオネの体をとらえると思われたが、紙一重で障壁で防がれてしまう。麻人の拳は不可視の壁を殴りつけ鮮血を散らした。

「徒手空拳と魔術の違いこそあるが実力は拮抗しているね。正直、決着がつくとは思えない」

「なら戦い続ける必要があるのか？」

「もちろん。私は魔王として帝国の脅威を排除しなければならない」

障壁に阻まれた麻人の拳をリオネは掴み、強く握りしめる。

「キミは人間と魔族が種族の違いを超えて手を取りあえると信じている、そう言ったね？」

「そうだ。はじめは難しいかもしれないけど、きっとお互いに歩み寄ることはできるはずだ！」

「こうしてキミは私に攻撃して、私もキミに攻撃しているのに？」

「俺は戦いを止めたいから戦ってるんだ」
「奇遇だね、私も同じだよ。はじまってしまった争いを終えるには、勝敗をつけるか互いにもう嫌だと思うまで戦わなければいけないからね」
　お互いの息遣いがわかるほど顔を近づける。リオネは笑みを浮かべ、そんな彼女を麻人は仏頂面で睨みつける。
「仮に、私がここで和平を結ぼうと提案したとして、キミを異世界からこちらの世界に召喚した誰かがいるはずのエルシュノン王国が本当に和平を受け入れると思っているのかな？」
「なぜ受け入れないと思う？　俺が信頼する仲間の中にはエルシュノン王国の王女だっている。彼女が和平という解決策を考えたんだぞ！」
「聖女殿のことなら知っているよ。キミが勇者として一年前に召喚されて以来、よき相棒として支えていることも」
「ずいぶん詳しくて正直驚いた。そこまで知っているなら――」
「――だがっ！　今、こうして戦いは起きている！　キミたち人間は私たち魔族たちの領土に攻め込み、勇者と魔王が戦っているではないか？」
　リオネの言葉に反論することができなかった。なぜなら、原因不明の召喚によって麻人が一年前にこの異世界イシュタリアに呼ばれたときから魔族と人間の争いがあったからだ。
　生きていくため、帰るすべを探すため否応なく戦いに巻き込まれた麻人だからこそ、戦いを止めたいと思っていた。同時に、難しいことも理解している。
　何度も目を背けたくなることもあった。それでも知りあった仲間たちが傷つかないですむ世界が欲しくて、たとえ帰れなかったとしても安住の地が欲しくて戦いを終わらせたいのだ。
「俺は諦めない！　確かに、和平なんか望まないと言う人間だっている。でも、戦いが終われば喜ぶ人間のほうが多いに決まってるじゃないか！　家族が傷ついて喜ぶ奴がいるか？　親しい仲間が死んで喜ぶ奴がいるのか？　それは、魔族だって同じだろ！」

「同じに決まっている！　だから私は戦うのだ。長きに渡る戦いを終わらせるために！」
　リオネの魔力が高まり、身体強化している拳を痛いほど握りしめてくる。
「キミたちには感謝をしているんだよ？　全面戦争もありえたはずだが、私との一騎打ちを望んでくれたおかげで民が犠牲にならなくてすむ」
「俺たちだって魔族を傷つけたいわけじゃない」
　はじめこそ兵士同士の戦いにまで発展しかけたが、麻人の仲間でありエルシュノン王国第二王女の聖女アンナ・エルミートのおかげで全面戦争は防がれていた。
　エルシュノン王国兵は帝国との国境まで下がり、勇者一行と呼ばれている麻人と仲間たちだけが魔王城へ赴くことを提案し、魔王が受け入れた。
　そして、勇者と魔王の一騎打ちがすでに一日以上続いている。
「ひとつだけ忠告しておこう。キミのことは好意的に思っているし、それだけの力を持ちながら魔族を必要以上に傷つけない優しさは見習いたいとさえ思う。だけどね、人間すべてがキミのように優しいわけじゃないんだ。異世界人のキミとこの世界の人間では根本的に価値観が違うんだよ」
「言われるまでもない。だからって俺が戦いを終わらせることを諦める理由にはならないだろ？」
「そうだね。その通りだ。ならば、決着をつけよう」
　ずっと握りしめていた麻人の拳をリオネが離す。即座に距離を取り魔力の循環を活性化させて構える。
「正直に白状すると、もうそろそろ私の魔力も底をつきそうだ。長い人生でこれほど消耗したことはない。もっとも、君も同じように消耗しているだろうけどね」
「アンタが強すぎるんだよ」
　気付けばお互い傷だらけだった。麻人は魔術防御を幾重に施したコートで身を守っているが、それでも防御を抜けた攻撃のせいで体中から血を流し、衝撃で骨が何本も折れている。痛みのせいで叫びのたうち回りたいが、気合と意地で我慢しているだけ。
　リオネも同様に防御を放棄している黒尽くめの軽装が破れ、白い肌が露出し血を流しているのがはっきり

と見える。
「お互いに満身創痍というところで、勝敗を決めようじゃないか。和平を望んでいたとしても、今起きている戦いを終わらせるためには――どちらかが勝たなければならない」
「なら――決着をつけて平和に向かって進もう」
疲弊しきった体に鞭うって麻人は魔力を体の奥底から引きずりだす。何度も繰り返した身体能力向上魔力『金剛力』を発動させて爆発的な力を纏う。
すでに限界は近い。あと何度攻撃できるかわからない。
リオネも息を切らせながら魔法陣を幾重にも展開している。
「行くぞ、魔王リオネ・シュタイン！」
「来い！　勇者叶海麻人！」
強化された脚力で石畳を蹴り砕き疾走する。リオネの魔法陣から雷撃を纏った闇の刃が放たれ、蛇のように迫りくる。
一撃目は脚力だけで避けてかわし、続く二撃目も魔力を込めた手刀で相殺する。三撃目で右足を斬り裂かれるが奥歯を噛みしめ走り続ける。四撃目で防御の上から利き腕を折られ、右目に痛みと熱が走り視界が真っ赤に染まる。
最後の一撃を胸に受けるが、強化された体は切断されることはなかった。代わりに深く横一閃に斬られ鮮血を吹きだす。
激痛に顔を歪めても足を止めるつもりはない。
すべての攻撃を受けきった麻人は残された渾身の力を込めて、大きく拳を振りぬいた。
「うぉ――おおおおおおおおっ！」
リオネが展開した防御障壁を殴り砕き、彼女の脇腹に突き刺さる。骨が折れていくのを感じながら、拳を振りぬきリオネの体を大きく吹き飛ばす。
大きく背後へ吹き飛ばされたリオネの細い体は地面に数回バウンドして、地面を滑っていく。
渾身の一撃を放った麻人も体中のいたるところから鮮血を流し、息を切らして膝を着きその場に力なく倒れた。

「まだ……負けて、いない、よ」
脇腹を押さえ、口から血を流しながらもリオネは足を震わせながら立ち上がる。
麻人も立ち上がろうとするが、体に力が入らない。視界が揺れて焦点が合わない。
何度も咳き込み血を吐きながら、わずかに残った魔力を使い意識を失いそうになりながら死に物狂いで立ち上がる。
「このまま続ければ、お互いに、死んでしまうかもしれない、ね……」
「……そう、だな。ちく、しょう」
もう痛みすら感じることもない。自分の体がどうなってしまったのか理解できないまま、麻人はリオネに向かって、一歩、また一歩と近づいていく。
自分でも限界だとわかっている。それでも負けられないという気持ちが足を動かしている。今までともに戦ってくれた仲間たちのため、戦いを終わらせるためにも、勝たなければいけない。
「……俺は、負けられないんだ」
たとえ命が燃え尽きたとしても構わない。残っているすべての魔力を力に変換する。
「死ぬ気かい？」
「ふざけんな、俺は勝つんだ」
鉛のように重い足を引きずりながら麻人の闘士は燃え続ける。
リオネは口元を拭い、笑みを浮かべる。
麻人にはリオネが笑った理由はわからない。しかし、同じように口をつり上げた。
「今度こそ——最後だね」
ともに魔力を高めていく。体内からあふれでた魔力がぶつかりあい暴風となって吹き荒れる。
お互いの目があった。もう会話はいらない。最後の一撃を繰りだそう。
麻人は拳を振り上げ、リオネは突きだした両腕に魔法陣を展開していく。
だが、二人の魔力が限界まで高まったそのとき、第三者の魔力が解き放たれたのを感じて動きが止まった。
「——な、に？」

「な、なんだよ、これ？」
強力な結界が二人を閉じ込めるように覆っていく。
鏡のように反射する正方形の集合体が壁となり地面を、壁を、天井すべてを囲い埋めつくした。
突然の出来事に、理解が追いつけず硬直している麻人にとって聞き慣れた声が結界内に響き渡る。
「ご苦労さまでした、叶海麻人様」
「その声は、アンナか？」
「はい。アンナ・エルミートです。今までありがとうございました、勇者様」
「……どういう意味だよ？」
アンナ・エルミートはエルシュノン王国第二王女であり、国内にある古代遺跡に現れた麻人を保護した人物。一年の間、ともに戦いをくぐり抜け、信頼関係を築いた麻人にとってかけがえのない仲間だ。
鈴を転がすような声が結界内に響く。魔王との戦いを忘れて麻人はその場に立ちすくむ。
「本当に長い間ありがとうございました。貴方のおかげで憎き魔族の王を殺すことができます。この戦争は私たちの勝ちです」
「な、なにを言ってるんだよ。戦争に勝ちとか、そんなことどうでもいいって言ったのはアンナじゃないか。魔族とだって手を取りあって、笑いあえるようになるって俺に教えてくれたのは、お前だろ！　アンナ・エルミート！」
血が体中から吹きだすのを無視して叫ぶ。
「答えろ、答えろよ、アンナ・エルミートぉおおおおおお！」
しかし、返事はなかった。
麻人の脳裏にどれも認めたくないことばかりが浮かんでは消えていく。
「……叶海麻人」
絶望の表情を貼りつけた麻人に気づかうような声がかけられる。だが、麻人が示したのは怒りと拒絶だった。
「やめろ。そんな目で俺を見るな」
「落ち着くんだ……私がキミをどんな目で見たというんだ？」

「どうせ内心で笑ってるんだろ？　和平だなんだと言いながら、仲間に裏切られた俺を！」
「違う、私は――」
「違うものか！　ああっ、くそっ！　どうして、どうしてこんなことになったんだ！　俺はただ、俺は――あれ？　俺はなにをしたかったんだ？」
　頭を抱えてうずくまり、鏡状の結界に映る自分に問う。
「異世界に迷い込んで、地球に戻ろうとしたけど戻れなかった。だから俺は少しでも、この世界から戦いがなくなればいいと思ったんだ。そうだろ？　答えろ！」
　鏡越しの自分に向かって何度も拳を振りおろしながら、血とともに叫び続ける。
「落ち着くんだ、キミがすべきことはここから脱出することじゃないのか？」
　血にまみれた拳をリオネが掴んで声をかけてくるが、自嘲するように笑いしかでてこない。
「笑わせるな。いいように利用された俺が外にでてどうする？　――ああ、外にだす気はないみたいだぞ、ほら」
「なに？」
　頭上を指さすと、リオネの視線が上を向く。そして、驚愕に目を見開いた。
「馬鹿な……あれだけのものにまったく気付かなかったというのか？」
　視線の先には、太陽のように輝く炎の塊が頭上を埋めつくしていた。魔力も熱もなにも感じさせないが、本能でただ炎だとわかった。
　いつの間にこれだけの質量を放ったのか疑問に思うが、すぐにどうでもよくなってしまう。
「障壁を張るぞ。あの炎から少しずつ魔力を感じられるようになった。私たちが疲弊しているせいもあるが、隠密性に長けた魔術だと思っていいだろう。だが、問題はそこではない。あの炎の塊がハリボテでなければ私たちがなにもしなければ焼け死ぬ」
　リオネは力なく地面に座っていた麻人の襟首を掴んで無理やり立ち上がらせる。
「いつまでそうしているつもりだ？　ショックを受け

ているのはわかる。私もアンナ・エルミートに思うことはある。だが、今は生きろ。生きなければ駄目だ！」
「どうして？」
「キミは利用されて捨てられてしまったおもちゃじゃない。生きている人間だ。ならば足掻け、みっともなくても泥臭くとも。生きようとすることは恥ではない。生きることを放棄し諦めることこそ恥だ！」
リオネの手のひらが麻人の頬を張る。何度も、何度も繰り返す。
「生きることを諦めるな、ともに生きよう——叶海麻人っ！」
「アンタさ、自分で言ったことわかってる？　俺、敵だぜ？」
「私はキミのことを敵だと思っていない。わかりあえる友人になる……ために戦っていると思っていた」
「馬鹿だよ、アンタ。でも、ありがとう」
あまりにも真っ直ぐなリオネの言葉に、麻人の魂が揺さぶられたのを確かに感じた。
このままでいたくないと思えるようになった。

ありがとう、の一言にどれだけの気持ちが込められていたのか、きっとリオネにはわからないだろう。
「馬鹿で結構だ。では、キミの瞳から諦めが消えたところで、障壁を張ろう。この魔術を少し解析してみた。おそらく殲滅系魔術だ。範囲こそ狭いが、結界内に閉じ込めた対象をすべて殺すためのものだ。隠密性に優れているが特徴だが、私はこのような魔術は知らない。私たちにできることは、ただ耐えるだけだ」
「つまり？」
「生き残れば私たちの勝ちだ」
「単純でいいね。じゃあ、命を削ってでも生き延びようぜ」
もう魔力は残っていない。魔術障壁という初歩中の初歩である魔術だが、障壁にどれだけ魔力を注ぎ込むかによって強度は大きく変わっていく。本来なら麻人もリオネも規格外の魔力量を持っているのだが、一騎打ちによって使い果たしている。
ならば生命力を魔力に変換させて使うしかない。
文字通り、命がけだ。

「叶海麻人、魔術が動くぞ！」
リオネの声に大きく深呼吸をして、限界まで引きだした魔力を魔術障壁として展開する。
同時に、炎の塊から結界内を覆いつくすように炎が波となって落ちてくる。
麻人は魔術障壁越しに体が焼けただれてしまいそうな熱を感じ、呼吸するのさえ辛くなるのを感じた。
隣で魔術障壁を幾重にも張るリオネの表情に焦りと苦痛が浮かんでいるのが見える。
このままでは駄目だ、と悟った。二人とも助からないと本能が感じ取ってしまった。いまだ、炎の波は届かない。ゆっくりいたぶるように迫りくる。
少し距離が近づく度に、肺の中まで灰になりそうな熱が襲いかかってくるのだ。諦めたいわけではないが、為す術がないと思ってしまう。
「無駄な抵抗をしなければ、苦しまずに死ぬことができますよ？」
生きようとする抵抗を嘲笑うようにアンナの声が届く。視界が怒りで赤くなるが、感情に身を任せるような愚かなことはもうする気はない。
するべきことはもう決まっている。
麻人はコートを脱ぎ、隣に立つリオネの頭からかぶせた。
「なんのつもりだっ？」
「このコートは魔術防御が施されている。アンタの馬鹿みたいに強力な魔術を受けて俺が何度も立ち上がれた理由のひとつがこれだ。使ってくれ」
リオネの瞳が大きく見開かれる。
「生きることを放棄することは恥だと言ったばかりだよ？」
「放棄するわけじゃない。アンタだってわかっているはずだ。こんな障壁じゃ気休めにしかならないってことを。なら、どちらかだけでも生き残る努力をしないといけない」
「だったらキミが――」
「お前は王だろう！　魔族の王、魔王だろう！　なら生きろ、生きてくれ。そして、どうしてアンナが俺を利用して裏切ったのか突き止めてくれ」

リオネの言葉を遮り、言いたいことだけを言うと麻人は彼女の体を抱きしめ地面に倒し覆いかぶさる。
「やめるんだ！」
「これ以上喋るな、熱で喉がやられるぞ」
コートで顔を包み上から力の限り押さえつける。苦しいのは我慢してくれ、と内心謝罪しながら眼前に迫りくる炎の波を眺めて麻人は呟く。
「思えば色々なことがあった一年間だった。楽しいことも、嫌なことも、本当に色々なことがあった。大切な仲間とも出会えた。割りと、満足してるんだぜ？」
最後の抵抗に限界以上に生命力を削り魔術障壁を展開した麻人は、抵抗しようとするリオネの体を強くしっかりと抱きしめる。
そして、二人は灼熱の波に飲み込まれた。

第一章　喪失

ちゃぷん、と水を弾く音が聞こえて重いまぶたがゆっくり開いていく。

視界いっぱいに白いもやが広がり、自分がどこにいて、どうなっているかもわからない。

浮遊感を覚えて体を動かそうとするが、指一本動かず代わりに体中に鈍痛が走る。

自分の身になにが起きたのか把握できない不安から、奥歯を噛みしめ痛みを堪えて体を起こそうとするが、体は鉛のように重くいうことをきいてくれない。

なんとか目だけを動かし周囲を見渡すと、叶海麻人はようやく自分が水の中に浮いていることに気付いた。

「――俺は生きているのか？　それとも、もう、死んだのか？」

小さい声でわずかに呟くが、返事は誰からもない。

再び目を動かし誰かいないか探すが、視界が届く範囲に誰もいない。自分の生死さえわからず再び閉じてしまいそうになるまぶたの重みが恐怖となり、もう一度痛みを無視して体を動かそうとする。

そのとき、水音が響き小さな波が体を揺らした。

「誰か、いるのか？」

想像以上に自分の声が小さいことに驚きながら、誰かがいるのではないかという期待に喉から必死に声をだそうとして――麻人は硬直した。

膝上まで水に浸かった一糸纏わぬ美女が近づいてきたのだ。

濡らした亜麻色の髪を腰まで伸ばし、水滴を弾く細く引き締まった肢体は初雪のように白い。秘部を隠すはずの陰毛はなく、見てはいけない女性器の割れ目がくっきりと見えている。

目を背けなければ、と思い体を動かそうとして、再び鈍痛に襲われ体が大きく波紋を立ててしまう。

「――っ！」

こちらの動きに気付き全裸姿のまま美女が水の中を歩いてくる。彼女の顔に浮かぶのは、裸を見られたことによる羞恥や怒りでもなく、純粋な安堵だった。

「目が覚めたのですね……よかった！」
涙さえ浮かべて喜びの表情を向ける美女を、麻人はようやく思いだすことができた。
彼女の名はクラリッサ・ルルクセン。魔王の傍に控えていたメイドだ。
なぜ魔王のメイドがこの場にいるのか、そもそもどうして全裸なのかと疑問は多々あるが、少なくとも自分が生きていることだけはわかった。
間違いなく炎の波に飲み込まれ、体が焼けただれていく感覚もはっきりと覚えている。だが生きている。それだけも驚くべきことなのに、死んでも不思議ではない炎に体を焼かれたはずが、視界に映る自身の体には火傷の痕すら見えなかった。
疑問の言葉を発しようとしたが、裸体のクラリッサに抱きかかえられてしまい困惑に言葉を飲み込んでしまう。
決して大きくはないが柔らかな胸の膨らみが頬から伝わり、彼女の体温と甘い匂いに脳が刺激されくらくらする。
「この池の薬草に賭けて正解でした。本当に、よかった……」
「……あの、説明してほしいんだけど？」
「ああっ、そうでしたね。つい感情が先走ってしまい、申し訳ございませんでした」
謝罪の言葉とともに抱きしめる力が緩む。
「麻人さまはどこまで覚えていらっしゃいますか？」
なぜ魔王つきのメイドにさまづけされているのか不思議に思うが、今は現状把握のほうが大事だった。
「ごめん、あまり覚えてないんだ」
「無理もありません。あなたは魔王リオネさまとともに魔術の炎に焼かれ瀕死の状態でした。いつ死んでもおかしくなかった麻人さまをこの薬草の池に沈め奇跡を祈っていました」
クラリッサの肢体から視線をすぐ真下へ動かす。確かに水の下には植物がところせましと敷き詰められているのが確認できた。
「ここに生息する薬草はあまりにも効力が強く危険です。それゆえに池の水そのものが強い治癒の力を持っ

ているのです。全身に酷い火傷を負っていた麻人さまなら強すぎる治癒の力も足りるかどうか不安でしたが、こうして傷が癒えてくださいました」

生きていることも、火傷が見当たらないこともなんとなくだが納得できた。しかし、魔族のクラリッサが敵対していた自分を生かす理由がわからない。

問いかけようとしたが、自分のことよりも一緒に焼かれたはずの魔王の安否が気になった。

「魔王は？　魔王は無事か？」

「ご無事です。麻人さまが庇ってくれたことはお聞きしています。麻人さまのおかげで魔王さまは軽傷ですみました。わたくしたち帝国は魔王さまを失うわけにはいきません。助けてくださったことを心から感謝いたします」

「ならよかった……」

嘘偽りなく心から安堵した。

魔王リオネと戦ったことは事実だが、お互いに相手を殺すつもりで戦ったわけではない。憎しみもなければ因縁もない。ただ、和平への一歩を築くために避けては通れない戦いだったと麻人は信じている。

「心から魔王さまのことを案じてくださるのですね。お優しい方です」

慈愛に満ちた笑みを浮かべ頭を優しく撫でてくるクラリッサに戸惑いを隠せない。

いくら助けた形になったとはいえ、魔王と戦った自分への好意的な態度への疑問。なによりも女性経験皆無の麻人にとって美しい容姿と肢体を惜しげもなく見せているクラリッサに、安堵した麻人の体は素直に反応してしまう。自分でも制御できない股間の高ぶりに羞恥で頬が熱くなっていくのを自覚する。

抱きしめられているせいでそそり勃つ逸物を押しつけてしまう形となり、麻人の羞恥は最高潮に達した。

クラリッサも気付いたのだろう。恥ずかしくて顔を見ることができないが、彼女から伝わる体温が熱くなった気がする。

「お、お気になさらないでくださいっ！　お、おおおお互いに全裸ですし、男性ですのでしかたがありません。むしろ、わたくしのこの貧相な体にもかかわらず

興奮していただけることは女性として嬉しいといいますか、いえ、そうではなく、麻人さまがお元気になられたことは嬉しいです」
動転しているのか、今まで落ち着いた雰囲気だった大人の女性が一変して慌てた態度をとる。そんなクラリッサの可愛らしい姿を見て自然と笑みがこぼれた。
すると、気が抜けてしまったのか、彼女に捕まっていた手から力が抜けていき、まぶたがゆっくりと閉じていく。
「……麻人さま？　どうしました？」
突然、体を弛緩させたことに気付き声がかけられるが、返事をすることができない。
「ごめん……すごく、眠いんだ」
なんとか絞りだすように現状を伝えると、安堵する呼吸が伝わってくる。
「まだお体が完全ではなかったようですね。今はただゆっくりとお眠りください。わたくしは片時も離れずずっとお側にいますから、安心してお休みください」
クラリッサの優しげな声が子守唄に聞こえた。
襲いかかる睡魔に耐えきれず、麻人は目を閉じ、気絶するように意識を手放したのだった。

＊

「彼は無事かい？」
意識を失ったように眠った麻人を抱きかかえ、ゆっくり薬草の池に沈めるクラリッサの背後から女性の声が響く。
「魔王さま……いらしていたのですか？」
「うん。彼のことが気になってね」
白い霧の中から現れたのは魔王リオネ・シュタインだった。魔王としての闇色の衣装ではなく、町娘のような簡素な衣服を身につけたリオネが杖を片手に近づいてくる。
「わずかな時間でしたが目をお覚ましになり会話もできました。劇薬に近い薬草の力を利用することに危険性を感じていましたが、結果的には正解でしたね」
「たとえ劇薬だったとしても彼を癒やすためには、こ

の秘薬に賭けるしかなかった。そして賭けに勝ったことは素直に嬉しいよ」
「時間こそかかってしまいましたが、火傷や怪我はすべて癒えました。あとは体力が回復することを願うのみです」
クラリッサだけではなくリオネにも安堵の表情が浮かんでいる。彼女たちは本心から麻人が助かったことを喜んでいるのだ。
「正直、彼は助からないと思っていた。庇ってくれたおかげで私は軽傷だったが……まさか聖女アンナ・エルミートが奥の手としてあれほどの魔術を隠し持っていたとは想像していなかったよ」
「見たことがない魔術でした。魔王さまたちを囲い爆発させた結界魔術も、結界の外でわたくしや麻人さまの仲間を拘束した魔術も、すべて未知なるものでした」
麻人とリオネの一騎打ちを邪魔し、双方を亡き者にしようとしたアンナ・エルミートの魔術は長寿である魔族の二人にも理解できず手も足もでなかった。
リオネは為す術もなく攻撃を受け、麻人が庇わなければ死んでいただろう。クラリッサにいたっては主の危機に身動きひとつとることができなかった。
リオネもクラリッサも麻人に感謝した。同時に、不憫にも思っていた。結果、二人は麻人を助けることを選んだ。
もともと憎くて戦っていたわけではない。言葉ではなく、戦うことでわかりあおうとした結果の戦いだったのだ。
リオネが勝利しても麻人の命を奪うつもりはなかったし、麻人だってリオネの命を奪うつもりはなかったはずだ。
なによりも捨て駒のように利用された麻人を捨て置くことなど二人には決してできなかった。
「少しお話ししましたが、麻人さまは聖女アンナ・エルミートに裏切られたことを覚えていなかったように感じました」
「そうか……。一時的な記憶の混乱のせいか、それとも裏切られた事実を受け入れたくなかったのか私たちにはわからない。どちらにしても、彼にとっては辛い

ことだろうね」
「目を覚ました麻人さまにどこまでお話しするつもりですか？　いきなりすべてをお伝えするのは酷ではないかと思うのですが……」
「もう一度目覚めたとき、彼の記憶がはっきりしているなら隠しごとはしたくないな。ありのまま伝えたいんだ。記憶が混乱しているようなら、少しずつ時間をかけていこう。命の恩人の心を必要以上に傷つけたくないよ」
　池の中で眠り続ける麻人を眺めてリオネは優しく微笑む。
「今はゆっくり休んでほしい。目覚めれば、否応なくキミは戦いに巻き込まれてしまうのだから――」

＊

　麻人が再び目を覚ますと、こちらを覗き込んでいるクラリッサと目が合った。
「よかった……お目覚めになられましたね。とても深く眠っていたので心配しました」
　大きく息をつくクラリッサは意識を失う前と変わらず一糸纏わぬ姿のままだ。同じく麻人自身も裸だ。
　池の中心に浮かんでいる体を支えているのはぬるま湯のように温かい水と、クラリッサのか細い腕だけ。
「もしかして……ずっと俺のことを？」
「はい。片時も離れず側にいました」
「ありがとう、俺をひとりにしないでくれて」
「わたくしが麻人さまをおひとりにすることは決してありえません、ご安心ください」
　慈愛に満ちた微笑みに心が暖かくなる。
　どうしてこの人はこんなに優しくしてくれるのか不思議に思いながら、彼女の優しさに身を委ねてしまう。
「体を動かすことはできますか？」
「……大丈夫。さっきよりも痛みは少ないから動けるよ」
「ならば池から上がりましょう。この池の治癒力は重傷者以外には毒ですので」
　体を起こす麻人を支えるクラリッサの言葉を聞き、

とっさに彼女の細い腕を掴む。
「麻人さま？」
「アンタ、ずっとここにいたよな？　体は平気なのか？」
「ちゃんと対策をしてありますので大丈夫ですよ」
思わず心配の声をかけクラリッサの裸身を見回し異常がないか探る。透き通るように白い肌に赤みがさしているが、怪我や火傷ではないことに安堵する。
「あの、その、すみません……あまり見られると、恥ずかしいのですが……」
「ご、ごめんっ！」
クラリッサの肌が赤くなった理由を理解し、手を離して後ろを向く。
しでかしてしまったことを反省しながら、恥ずかしさを覚えてしまいクラリッサの顔を見ることができない。
「いえ、心配してくださったことはわかっていますので、謝罪は必要ありません。さあお着替えを用意してありますので池から上がりましょう」
クラリッサが麻人の手を掴み岸に向かい誘導する。
濃い霧の中からだと岸は遠く見えるが、右手に感じるクラリッサの体温が安心させてくれる。
できるかぎりクラリッサの裸体を後ろから見ないようにしながら、麻人は岸へとたどりついた。
大きなタオルを渡され、とりあえず腰に巻くとようやく羞恥から解放される。クラリッサも体を覆うようにタオルを身につけており、お互いに目が合うとホッとしたように笑みを浮かべあった。
少しだけ残念と思ってしまったことを反省しながら、クラリッサが用意してくれた下着と、ジーンズと白いシャツに着替え終えるとタオルで髪の水分を拭う。
「そういえば、髪がずいぶん短くなったな」
イシュタリアへ召喚されてから一年間、伸びに伸びた黒髪はかなり短くなっていた。きっと炎に焼かれてしまったのだろうと判断するが、特に髪型にこだわったりはしないので楽でいいと考える。
体に不調がないか確かめるため、右腕から順に体をほぐすように動かしていく。前回目を覚ましたときか

らどのくらい時間が経ったのかわからないが、鈍痛は消え失せており、体も自分の意志でしっかり動かすことができることに安堵の息を吐く。

引き攣るような痛みをときどき感じてしまうが、生きている証拠だと受け入れた。

どれだけ体が回復したのか確かめようと魔力を循環させようとする。だが、体内から魔力を感じられなかった。

「あれ？」

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもない。それにしても、着替えるのが早いね」

体の不調なのだろうと思い、声をかけてきたクラリッサに視線を移すと、すでに彼女はメイド服に身を包み、亜麻色の髪をアップにまとめてヘッドドレスを身につけていた。

「メイドの嗜みです。……もしかして、着替えを見たかったのでしょうか？」

「やめて。そうじゃなくて、ああ、もう！」

からかわれているのを自覚しながら、クラリッサの裸体を思いだしてしまい顔が熱くなっていくのを止められない。

「ふふふ、ごめんなさい。少しからかってみたくなってしまいました。では、わたくしが満足したところで向かいましょう」

「向かうって、どこへ？」

「少し歩くことになりますが、帝国帝都であるクサナギです。そこに魔王さまのお屋敷があり、魔王さまが麻人さまをお待ちしています」

「クサナギ？」

異世界らしからぬ街の名前に思わず首を傾げてしまう。まるで故郷地球に住む日本人の苗字だ。

「初代魔王さまのお名前から取られたのです。ご存知ありませんでしたか？」

「知らなかった。魔王城がある帝都は、ただ帝都としか呼んでなかったから。それにしてもクサナギか……」

まさか異世界で日本を思いだす名が聞けるとは思っていなかった麻人には、帝都クサナギの名はどこか懐

かしく、地球を思いだすのに十分すぎた。
「帝都の名前は気になるけど、魔王が待ってるんだよな。急がないと」
「ご心配なさらずに。魔王さまもいつ麻人さまが目を覚ますかわかっていませんでしたので、特別急がなくても構いません。もちろん、麻人さまとの再会を心待ちにしているのも事実ですが」
「なら急ごう。俺も会って色々と話したいことがあるんだ」
「では、付いてきてください。しばらく森の中を歩くことになります」
クラリッサに先導されて木々の合間を歩いていく。薬草の池にいたときには気付かなかったが、ずいぶんと深い森の中にいたのだと麻人は知る。
前を歩くクラリッサはときどき後ろを振り返り麻人がちゃんと付いてきているのか確認すると、また歩を進めていく。
二十分ほど歩き続けると木々の数が減っていき、そして森を抜けた。
「お疲れさまでした。向こうに見える城壁の中が、帝国帝都クサナギです」
草原の中にそびえ建つ城壁は麻人が参加した戦争の名残はない。戦いの最中、壊れた城壁を見た覚えがあったが、すっかり修復されているようだった。
いったい魔王との戦いからどれだけ時間が経ったのか不安になる。
「出発しましょう」
草原をあっという間に抜けると、城門へたどり着く。城門を守る獣人の兵士とクラリッサが言葉を交わすと、驚くほどあっさりと帝都クサナギの中へ入ることができた。
「ちょっと、いいのかよ。俺、敵だったんだぞ？」
「幸いと言っていいのかわかりませんが、麻人さまはエルシュノン王国に召喚された異世界人の勇者ですが、名前も顔も最前線の兵士にさえあまり知られていません。ですから堂々としていれば誰にもわかりませんのでご安心を」
どうやらクラリッサは、自分の正体がバレやしない

かと考えているようにとらえたようだがそうではない。あまりにもあっさりと敵対していた自分を帝都に迎えたことを心配しているのだ。

傷を癒やし助けてくれたことといい、クラリッサだけではなく魔王リオネも優しすぎる。きっとなにか企んでいるのだと思うが、不確かな推測しかすることができない。

だが、答えはすぐそこまで近づいてきている。

クラリッサとともに賑わった帝都の中を歩き続ける。建物の数が減っていき、開けた土地に建つ大きな屋敷の前で足を止めた。

「ここが魔王さまの生活しておられるお屋敷です」

「屋敷住まいなのか、てっきり魔王城に住んでいるんだとばかり……」

「そう思ってしまうのもしかたがありませんが、実は——魔王城は常に無人なのです」

「え？」

「麻人さまをお迎えしたときのように、敵対する相手を迎え撃つ際に使われることがほとんどです。魔王城は外見こそ城ですが、強固な結界に覆われており外からの攻撃はもちろん、内側からの攻撃も外へ漏らすことはありません。民を守り戦うには、魔王城で戦ったほうが安全なのです」

意外な真実に目を丸くしてしまう。まさか魔王城が普段は無人だとは思わなかった。

魔王城にすんなり入ることができたと驚いたが、敵を迎え撃つ専用になっているとは当時はわかるはずもなく、ようやく疑問が氷解した。

言葉を失い唖然としているとクラリッサが苦笑しているのに気付く。きっと反応が予想通りだったのだろう。

少し悔しくなったそのとき、

「待っていたよ、叶海麻人。屋敷の前から気配がするのにいつまで経っても入ってこないから、待ちくたびれて迎えにきてしまった」

「——リオネ・シュタイン」

簡素な白いワンピースに身を包んだ魔王リオネ・シュタインが屋敷の中から麻人を出迎えた。

「無事だったんだな？」
「キミのおかげだよ。心から感謝している。私もキミも言いたいこと、聞きたいことはたくさんあると思うけど、お互い病み上がりだ。話は屋敷の中でしよう」
「ではお茶の支度をします。麻人さま、失礼します」
リオネの提案に頷くと、クラリッサが麻人に向かい頭を下げて屋敷に一足先に入っていく。
クラリッサを見送りリオネは笑顔を浮かべた。
「なんだかクラリッサはずいぶんとキミが気に入ったみたいだね。ちょっと妬けてしまうよ。さ、こっちだよ」
「待ってくれ、魔王」
「私のことはリオネと読んでほしい。私もキミのことを親愛と友情を込めて麻人と呼びたいからね」
「ならリオネ、聞かせてくれ。助けてくれたことには感謝しているけど、どうしてここまでしてくれる？俺を帝都に、屋敷に迎え入れるなんて、はっきり言わせてもらうと正気じゃない」
麻人の偽らない言葉にリオネは笑いだす。
「あはははははっ。正気じゃない、か。確かにそう思われるかもしれない。でも私は正気だよ。だいたい、キミだってあのとき私を助けてくれたじゃないか？」
「それは――」
「あとから口で言うことのできる理由なんて大したことじゃない。そのとき、なにを強く思ったのかこそ一番大事なんだと私は思っている。麻人は私を助けてくれた。私も麻人を助けたかった。ね、理由なんて簡単だと思わないかな？」
「簡単じゃなくて、単純だろ」
呆れた声をだしてしまうが、リオネは変わらず笑顔を浮かべたままだ。
「単純で構わないさ。――誰かを助けることに理由なんていらない。私はそう思っている。もし、もっと理由を必要とするなら命の恩人を死なせたくなかった、魔族と人間の和平を願ってくれたキミを死なせてしまうのは惜しかった。どうだい納得できたかな？」
「とりあえず、納得しておくけど……」
「麻人は意外と面倒な性格なんだね。まあいいよ。話

しあうことはこれから何度でもできるから、今から楽しみだよ。今日からこの屋敷がキミの家だ。我が家だと思ってくつろいでほしい」

そう言って手を取り屋敷の中へ連れていこうと引っ張っていくリオネに動揺を隠すことができない。しかし、同じくらい懐の深さと優しさを感じて感謝するのだった。

＊

応接室と思われる部屋に通された麻人は、リオネと向かいあう形で席につく。

テーブルにはクラリッサが淹れてくれた紅茶が湯気を立てている。体が飲まず食わずだったことを思いだすように目の前の紅茶を求めているのを自覚したが、わずかな躊躇いがあった。

「飲まないのかい？　ずっとなにも食べていないからいきなり食事というわけにもいかないと思ってお茶にしたんだけど」

リオネの背後に立つクラリッサが不安げな瞳をこちらへ向けていることに気付き、麻人は慌ててティーカップに口をつけた。

渋みが一切ない甘みのあるお茶の味と香りが口の中に広がっていく。

美味しいと素直に感じて、もう一口飲む。クラリッサが嬉しそうな表情を浮かべていることを確認してからテーブルにティーカップを戻した。

「クラリッサが麻人を気に入ったように、麻人もまたクラリッサを気に入っているんだね」

苦笑するリオネの言葉に気恥ずかしくなってしまい、クラリッサに向けていた視線を外してしまう。

気に入っているのとは少し違う気がするが、弱っていた自分のために傍にいてくれたクラリッサへ心を許してしまっているのも確かだった。

「二人をからかうのはあとで楽しむとして、話をしよう。きっと麻人は自分がどのくらい目覚めなかったのか、その間になにがあったのか知りたいと思っているんじゃないかな？」

「頼む、教えてくれ」
「もちろん、私が知っているすべてを話そう。まず、私と麻人の一騎打ちに聖女アンナ・エルミートが介入したことは覚えているよね？」
頷いて肯定する。
正直、思いだしたくないことだが、真実から目を背けることはできない。しかし、きっとなにか事情があったのではないか、と少ない可能性を信じようとしている自分がいることに内心驚いてしまう。
裏切られたというのにもかかわらず未練が残っていることを否応なく自覚した。
「私たちは未知の魔術によって結界の中に閉じ込められた。同じころ、結界の外ではクラリッサをはじめ、麻人の仲間であるトラスト・ランディ、シャナリヤ・ウェルカーはアンナ・エルミートによって拘束され身動きできずにいたんだ」
脳裏に仲間たちの顔が浮かぶ。
イシュタリアで早くに出会ったトラスト・ランディは兄貴と呼び慕ってくれた可愛い弟分だ。そしてシャナリヤ・ウェルカーはエルフであり戦うすべを与えてくれた師匠でもある恩人だった。
「トラスト、シャナリヤの二名は麻人を裏切っていない。クラリッサの話によると、麻人のことを助けようとしていたらしい」
「本当、なのか？」
「本当です。二人とも麻人さまの身を案じ、裏切ったアンナ・エルミートに怒声を上げていました。その後どうなったのかまではわかりませんが、おそらく拘束されたまま連れていかれたのでしょう」
裏切ったのはアンナ・エルミートだけ。その事実が慰めになるわけもなく、麻人は拳を握りしめることしかできない。
「私と麻人は結界内で襲いかかってきた炎に飲み込まれ、結界ごと爆破された。私は麻人が庇ってくれたから軽症ですんだが、キミ自身は重度の火傷で瀕死だった。恩人であり、同じ和平を目指す麻人を死なせたくなかった私は、賭けではあったが薬草の池に傷ついたキミを沈めることで癒やそうと考え――そして成功し

た」
　賭けをしなければいけないほど手の施しようがなかった事実に、アンナが本気で自分を殺そうとしたのだとわかる。
「……俺はどのくらい意識がなかったんだ？」
「二週間だよ。麻人は二週間、生死の境をさ迷っていたんだ。一度目を覚ましクラリッサと会話したことを覚えているね？　そこからさらに三日経った」
「十七日間も……その間に戦いはどうなった？」
「エルシュノン王国と帝国の戦争は休戦になったよ。私は倒されたことになり、エルシュノン王国の勇者・叶海麻人も犠牲になったことになっている。麻人の死を国に伝えたのもまた、聖女アンナ殿だ……残念だよ」
「そうか……俺は、死んだことになったのか」
　結局、アンナはなにを目的にしていたのだろう。和平を願いながら、魔王とともに自分を殺そうとした。なにが嘘でなにが本当なのかわからない。
　悲しさ以上に虚しさが胸の中に渦巻いている。
「慰めの言葉が見つからないよ。不幸中の幸いと言ったらキミは怒るかもしれないが、裏切ったのはアンナ・エルミートだけ。そして目論見がどうであったかわからないけど、麻人も私も生きている。決して彼女の思い通りになったわけじゃない」
「俺が生きている、か……」
「そうだ。その上で聞くけど、麻人はこれからどうしたい？」
「どうしたい、か……どうすればいいんだろうな」
　今後のことなど自分が一番知りたかった。
　地球に帰る方法だって見つかっていない。そもそも帰ることができるのかさえわからないのだ。
　明確な返事をすることができずうつむいてしまうと、リオネから声をかけられた。
「麻人が望むなら帝国からでていくことも許可するつもりだけど、できることなら一緒に平和のために協力してくれないかな？」
「協力？」
「帝国領土以外に住む魔族や迫害される種族、虐げられる人間を集め、帝国を多種族国家として確立させる。

そして、魔族を滅ぼそうとしているエルシュノン王国と戦わなければならない」

戦いを終わらせることができれば平和が訪れると思っていた麻人にとって、エルシュノン王国と戦わなければいけないことは衝撃だった。

「人間と和平を築き、共存したい。だが、それを邪魔しようと考える奴らはいるんだ。まずは、そこから叩かなければいつまで経っても和平は叶わない」

エルシュノン王国に立場上属していたが、王国が魔族を滅ぼそうとしていたことも知らなかった。

王族のアンナならエルシュノン王国の企みに気付いていたはずだ。すべてを知りながら和平という偽りの目的を掲げていたのかもしれない。

思考は必ずアンナにたどり着いてしまう。たった一年。言葉にすればわずかだが、未知なる世界で過ごした一年を支え続けてくれたアンナの存在は大きすぎた。

異性として意識していたわけではないが、心から信頼していたのだ。裏切られたという事実は今でも受け入れがたい。

「人間たちが帝国を倒せば平和が訪れるかもしれない。でもね、その平和は人間にとっての平和であり、魔族にとって地獄のはじまりだ。人間のための平和が訪れれば人間による人間以外の支配と搾取しか残らない。無論、抵抗する者も多くいるだろう。そうすれば偽りの平和はすぐに終わり、再び戦争がはじまってしまう」

それではいつまで経っても本当の平和が訪れることはない。

「アンナ・エルミートに裏切られた事実をつきつけられてショックを受けている麻人に追い打ちをかけるようで忍びないけど、はっきりと言わせてもらうよ。叶海麻人――キミは利用されていた」

「――っ！」

「魔王さまっ！」

改めて言われるとショックで言葉もない。

クラリッサの非難の声を浴びながらリオネは続ける。

「麻人のことは前々から調べていたんだ。勇者召喚魔術によってこの世界イシュタリアへ来たことも知っている。だけどね、イシュタリアに勇者召喚魔術という

魔術は存在しない。麻人が異世界人であったとしても、勇者じゃないと断言できる。なぜなら――勇者はすでに存在しているんだよ」

「……うそ、だろ？」

「私たちの間違いであってほしいと思うよ。だけど、勇者はどの時代、どの国にも存在しているし、決して珍しい存在ではない。勇者の定義は人によって違うのだけど、少なくとも勇者を召喚するなどという魔術はない」

はっきり言いきったリオネに、イシュタリアでの一年間が瓦解していく気がした。

一度として自分のことを勇者だと名乗ったことはなく、思ったこともなかったが、勇者がいるという真実に驚き呆然するとするしかない。

かつてアンナは言った、誰かが勇者召喚魔術でこちらの世界へ呼んだのだと。異世界に迷い込んでしまい右も左もわからず途方に暮れてしまった自分に慰めの言葉をかけ、導いてくれた。

だが、すべてが偽りだったのかと思うとなにを信じたらいいのかわからなくなる。

リオネの話が正しければ、またひとつアンナの嘘が明らかになってしまったことになる。

「俺は、俺はいったいどれだけ間抜けなんだっ！」

テーブルを叩き血がでるほど唇を強く噛みしめる。

衝撃でテーブルが揺れてティーカップが倒れて、紅茶がこぼれ広がっていく。こぼれた紅茶がカップに戻ることがないように、過ぎ去った一年を取り戻すことはできない。

拳が痛くて涙がこぼれそうになる。怒りに身を任せた自分への罰だと戒めようとして、気付いてしまった。

「落ち着いてくれ麻人……どうしたんだ麻人？」

リオネの声は届かず、麻人は信じられないものを見るように自分の両手を眺める。

目を閉じ、体内の中にあるはずの魔力を探るが見つけることができない。

「……まさか、嘘だろ」

声が震える。

悪いことは続くというが、いくらなんでもあんまり

だと神を呪い殺したくなる。
目を覚ましたとき、体の調子を確かめようと魔力を体中に循環させようとしたができなかった。だが、それは傷を負ったせいだと思っていた。
自分の保有魔力が規格外の大きさなのはアンナや師匠シャナリヤからも聞かされている。十全に制御できない魔力が感情のまま無意識に身体強化してしまうことも日常茶飯事だった。
そう――今のように怒りに任せて拳を振りおろせばテーブルは破壊されていたはずだ。
しかし、実際はテーブルが揺れてティーカップから紅茶がこぼれただけ。
つまり――魔力まで失ったのだ。
視界が真っ暗になる気がした。
裏切られ、死にかけ、なんとか生き延びたというのに戦うすべをなくしてしまったのだ。
リオネにこれからのことを尋ねられたが、なにをしていいのかわからないのではなく、なにもできなくなってしまったことを確信した。
「気持ちがわかるとは言わないけど、どうか落ち着いてほしい。感情的になったとして今ここではどうにもならないことは麻人にだってわかっているだろ？」
「……ああ。本当にどうにもならないよな」
諦めたように呟いた麻人にリオネが安堵の表情を浮かべて胸を撫でおろす。
「魔王さま、いくらなんでもすべてを明かしすぎたのではありませんか？　病み上がりの麻人さまにショックを受けさせてなにかあったらどうするのですか？」
責めるようなクラリッサの視線を受けリオネがたじろぐ。
「そ、そう言うけど、こういうことはあとから小出しにされてもショックを受けるはずだと思うじゃないか。なら最初にすべてを明かしたほうがショックは一度ですむと思ったんだ。それに、ショックを受けても私たちが支えればいい。違うか？」
「違いませんが……麻人さま大丈夫ですか？」
気づかうように声をかけてくれるクラリッサに返す言葉が見つからない。

リオネの言う通り、二度も三度もショックを受けたくないし、支えてくれるという言葉は嬉しく思う。だが、自分の身になにが起きたのか知れば裏切ったアンナのように態度を変えるのではないかと思えて不安が湧きあがってくる。

「なあリオネ、聞かせてくれ。嘘をつかれ利用された挙句、裏切られた俺になにができるんだ？」

「そんな卑屈な言い方をしないでほしい。……色々なことができると思うけど、戦力としても申し分ないと思う。魔王である私と一対一で戦うことのできる力を持つ麻人が協力してくれれば、戦わなければ救えない者たちも救うことができる」

「それってさ、アンナと違って事前に伝える伝えない違いはあるけど、今度はアンタが俺を利用するってことだろ？」

麻人の問いかけに、リオネはおろかクラリッサまで驚きに大きく目を見開く。

「なにを言うんだ？　どうして急にそんなことを？　利用なんて馬鹿馬鹿しい、私は麻人になにかを無理強いすることはしないし、するつもりもない。確かに協力関係になりたいと思っているけど無理ならそれでも構わないと思っている。無論、協力できないからといって帝国を追いだすことだってしないよ。麻人は、麻人の好きなように過ごしてくれていいんだ」

リオネが慌てたように否定するが、麻人は彼女の言葉を信じていいのかわからなくなっている。

「麻人さま……ショックを受けていることは痛いほどわかりますが、どうかわたくしたちを信じてください。わたくしたちは麻人さまを利用しようなどと考えてはいません」

「本当に？」

「もちろんだ」

「先祖と母に誓って」

「だけど、それは俺に価値があるからだろ？　規格外の魔力と、魔王と戦える力――じゃあ、その魔力がなくなったらどうする？」

自嘲するように麻人は笑う。

ようやくなにかがおかしいとリオネたちが気付き、

口を開こうとするが、それよりも早く麻人が言い放った。
「もう俺には魔力がない。なにも感じないんだ。身体強化もできない。さっきテーブルを本気で叩きつけたのに、カップが倒れただけだ。こんな俺のどこに協力することができる価値があるって言うんだ！」
再び感情に任せて拳をテーブルにぶつける。だが、テーブルはただ揺れるだけ。呆然と麻人の行動を眺めているだけの二人を無視して、何度も何度も拳を叩きつける。
強化できない拳から血が流れでたところで、我に返ったクラリッサが麻人の腕を抱きしめるようにかかえ動きを止める。
「本当に魔力がないのか？」
リオネが確かめるように目を細めて問う。
「見ればわかるだろ！　身体強化はできない。メイドひとり振り払うことだってできない！」
やり場のない感情に任せて麻人は叫び続ける。
「もう戦うことができない俺に用はないだろ！」
クラリッサの腕を強引に引き離し、部屋から飛びだそうとする。
「お待ちください！」
しかし、ドアを開けた瞬間、意識が遠のいていく。
「麻人さまっ！」
視界が暗くなっていく。体が傾き衝撃が襲いかかるが、なにが起きたのか理解できなかった。
クラリッサが何度も声をかけてくるが、とても遠く離れているかのように声が聞きとれない。
悲しみと苦しみに支配された心を抱えながら、麻人は意識を失ったのだった。

*

「無理をさせてしまったようだね……」
リオネはベッドで眠る麻人の髪をすきながら静かに呟いた。
「私はね、再出発してほしかったんだ。聖女アンナ・エルミートに利用された叶海麻人ではなくて、すべて

を知った上で前に踏みだした麻人を仲間として迎えたかったんだよ」
「……魔王さま」
沈痛な面持ちを浮かべているリオネにクラリッサはかける言葉が見つからない。
クラリッサもまた責任を感じていた。
一度はリオネにすべてを明かしすぎだと責めはしたが、彼女もまた麻人なら大丈夫だと根拠のない期待を勝手に抱いていたのだ。
リオネも同じだ。魔王である自分と戦える麻人なら、辛く悲しくても乗り越えることができると信じていた。
麻人に理想を押しつけていたことに、今さら気付いたのだった。
「どうやら本当に魔力を失っているようだね。麻人から魔力をまったく感じることができない。想定外の出来事ではあるけどキミを放っておくことなどしないよ」
さきほど麻人に言ったように、リオネは戦力だけを求めているのではない。魔族の中には魔力を持たない種族だっているが、戦うすべなどいくらでも用意することができるのだ。
リオネにとって大事なのは戦力としての叶海麻人ではない。イシュタリアとは違う価値観の世界で育った叶海麻人こそがなによりも貴重な存在なのだ。
魔族を敵だと考える人間たちの思考にとらわれず、手を取りあうことができると考えてくれる麻人だからこそリオネにとって何物にも代えがたい人物なのだ。
たとえ麻人の魔力が健在であったとしても、ただの力で世界が平和になると考えるほどリオネは楽天的ではない。
長く争い続けた魔族と人間が手を取りあえるようになるには時間が必要なこともわかっている。
自分たちは平和へのきっかけを作ることができればいい。魔族と人間が争うことのない世界への土台を作れればそれに越したことはない。
「私は急ぎすぎたのかもしれないね。叶海麻人が異世界人、いや地球人だと知ったときから勝手に期待して、希望を押しつけてしまったのではないかと反省してい

るんだ。もしかすると、考えてはいなかっただけで私もアンナ・エルミートのように麻人を利用するつもりだったんじゃないかと思うと自分が嫌になるよ」

だとすれば悪意がない分、アンナよりも質が悪いと思わずにいられない。

「わたくしも同感です。麻人さまの動向を調査したときから存じていましたが、長く調べていたことを長く接していたのだと勘違いしていたのかもしれません」

魔族は異世界人に敏感であり、過去にも麻人のようにイシュタリアに現れた異世界人の動向を探りどんな人物かを調べたことはある。

人間たちが知らない、異世界人が現れる『予兆』さえ魔族は掴んでいる。

元の世界に返してやることはできなくても、異世界からの迷い人に手を差し伸べたいと思えるほど魔族は異世界人に思い入れがあるのだ。

だが、その理由も、魔族の想いもなにも麻人に伝えることはできていない。

「麻人、私たちはもっと話しあわなければいけないね。キミの痛みを理解したいんだ。私の進もうとしている道を理解してほしいんだ」

意識を失いながらも涙を流す麻人はなにを思っているのだろうか。もしかしたら、アンナに裏切られたことを悲しんでいるのかもしれない。もしかしたら、魔族に利用されるのではないかと子供のように怯えているのかもしれない。

固く握る拳に、そっとクラリッサが手を重ねてそっと耳元で囁く。

「麻人さま、わたくしは絶対に麻人さまを裏切ったりはしません。目を覚ましたときにわたくしの話も聞いてください」

空いているもう片方の手で麻人の頬に伝う涙を拭うと、クラリッサはひとつの決意をするのだった。

*

深夜、蝋燭の明かりが部屋を静かに照らす中、麻人はただ窓の外の帝都を眺めていた。

屋敷の二階に用意された部屋から賑わう帝都がよく見え、耳をすませば帝都の住民たちの声も聞こえてくる。

人々の賑わいはエルシュノン王国領内にいたときとなにも変わらない。だからわからないのだ、なぜ魔族と人間が争い続けるのかが。

地球にだって争いはある。些細なものは学校という狭い範囲から、大きくなれば人種の違い、宗教の違いなど数えきれない。だが、所詮他人ごとだった。

異世界に迷い込み、魔族と人間の争いに関わり、なぜ争うのか疑問に思うことができるようになった。

そしてなにかできることはないかと考えるようにもなった。傷ついている人たちを見て、なんとかしたいと思ったのだ。

しかし、今はもうなにかをしたくとも力が残っていない。

戦いがすべてと言うつもりはないが、イシュタリアでは戦えなければ駄目だと学んだ。

意志を貫き通すために、誰かを守るために戦う力が必要だと、たった一年で痛いほど思い知らされた。

だから魔力を失い、戦うすべをなくした自分になにができるのかわからない。

利用する価値のないただの地球人が、異世界でなにをすればいいのかもわからない。

未来が真っ暗になり、もう笑うしかない。

リオネは利用するつもりはないと言ってくれた。戦うすべがないなら守ってくれるとさえ、目を覚ました自分に優しく言ってくれた。

彼女の優しさに感謝していながら、その優しさを信じることができないことに心底嫌気が差す。

頭の中がぐちゃぐちゃになっている。考えれば考えるほど、思考がよくない方へ向かい、悪意が心に宿っていく。

今のままでは駄目だと思い、麻人は思考することをやめた。考えることを放棄してしまった。

ただ目をつむり、帝都の住人たちの声に耳を傾ける。

そんなときだった。

「麻人さま、起きていらっしゃいますか？」

小さなノックとともに、囁くようなクラリッサの声がドア越しに聞こえた。
「……起きているけど、なにか用？」
素っ気ない返事をしてしまうが、クラリッサを気づかう余裕が今はない。
「お部屋に入ってもよろしいでしょうか？」
「どうぞ」
「夜分遅く失礼します」
クラリッサが室内に入ってくるが、麻人は窓から目を離さない。クラリッサを見ることができないのだ。
それでもクラリッサの言葉を待つが、なにも言ってこない。なにかを言おうとしている雰囲気は感じることができるのだが、いつまで経っても言葉がでてこないようだ。
正直、放っておいてほしい気持ちがある。
「なにか用があって来たんじゃないの？　ないんだったら――」
いつまで経っても部屋に入ったきり黙り込んでいるクラリッサにしびれを切らして彼女の方へ視線を向け、驚き体を硬直させた。
クラリッサは薄着だった。ただ薄着というわけではない。男を誘うような扇情的な水色のベビードール姿だ。同じ水色の下着もつけているが、その下着だって生地は薄く彼女の白い肌はもちろん、桜色の乳首がはっきり見えてしまっている。
少なくとも恋人でない男のもとを訪れる格好ではなかった。
どんな理由からこのような目のやり場に困る格好をしているのか疑問だが、もしかすると彼女にとって当たり前なのかもしれないと恐る恐る表情を窺うと、羞恥からか頬を赤く染めているのがわかった。
「そ、そんな格好してなんの用なんだよ？」
なんとか絞りだした声は上ずっていて、心底情けないとがっかりしてしまう。
麻人の疑問にクラリッサは顔を赤くしながら大きく深呼吸を繰り返し、意を決するように真面目な顔をして口を開いた。
「麻人さまは戦うすべが欲しいですか？」

冷水を浴びたように、麻人の中に冷静さが戻っていく。
「どうしてそんなことを聞くんだ？」
「わたくしなら麻人さまに戦うすべを与えることができるからです」
「――え？」
思わず耳を疑ってしまった。
一年間イシュタリアで争いの日々を送っていれば戦うすべを失った話を聞いたことは珍しいことではない。剣士が腕を失い、足を失ってしまい再起不能になる。腕くらいならまだ戦えるかもしれないが、麻人は魔力を失ったのだ。魔力喪失など聞いたことがない。麻人の知る限り、イシュタリアでは魔力がなければ人間は戦えない。
だが、クラリッサは戦うすべを与えることができると言う。仮に、強力な武器を渡されたとしても武器の使用条件に魔力が必要不可欠なことも知っている。だから驚き耳を疑ったのだ。
「わたくしだけが麻人さまに再び戦う力を与えることができます。その上でお聞かせください――力が欲しいですか？」
「欲しい」
考えるまでもなく即答した。
「理由を伺ってもよろしいですか？」
「この世界で生きていくには力が必要だ。俺は利用されて、裏切られたまま終わりたくない」
「復讐を望むのですか？」
「違うっ！　そうじゃないんだ……俺は、きっとまだどこかでアンナのことを信じてる。もしかしたらなにか理由があったんじゃないか、なんてありえもしない希望だって持っている。それを確かめるためにも前に進む力が欲しいんだ」
クラリッサの問いかけに隠すことなく胸の内をさらけだして答えた。するとなぜかクラリッサは一度頷くと、ゆっくりとベビードールを脱ぎはじめる。
「ま、待ってくれ、今の話とアンタが下着姿になることにどんな関係があるんだっ!?」
「麻人さま」

薄地に隠れていた肌が露出していることに、胸の鼓動が暴れだす。
「は、はい……」
「わたくしのことを抱いてください」
脱いだベビードールを床に落とし、ゆっくりと麻人のベッドへ歩み寄ってくる。
上気した頬、薄っすらと汗をかく引き締まった細く艶めかしい肢体が近づき手を握られた。麻人の手を握りしめたクラリッサの手は火傷しそうなほど熱い。
突然すぎる展開に硬直したまま動けずにいる麻人のすぐ横にクラリッサは腰をおろすと、胸板に寄りかかるように体を預けてくる。
「失った魔力を取り戻すことはできません。ですが、魔力を共有することでわたくしの魔力を麻人さまにお渡しすることなら可能です。――そのためにわたくしを抱いてください」
クラリッサの甘い香りが脳を揺さぶる。理性が焼き切れそうになるが、必死にこらえ麻人はか細い彼女の肩を掴んだ。
びくん、と跳ねるクラリッサの体はわずかに震えていた。興奮していた体から熱が抜けていくのがわかる。少し冷静になれたことを確認して深呼吸を繰り返すと、いまだ体を震わすクラリッサに声をかける。
「気持ちはすごく嬉しいよ、ありがとう。だけど、俺のために無理をしなくてもいいんだ。魔力のために女性を抱くなんてことはできないよ」
力は欲しいが、だからといってクラリッサが自身を犠牲にしてまで力を取り戻したいとは思えなかった。そんな麻人に向けてクラリッサが微笑む。
「麻人さまは優しい人です」
拒絶したにもかかわらず、クラリッサはゆっくり麻人の首に腕を回して抱きしめる。
彼女の体から震えは伝わってこない。
「自分のことで精一杯のはずですのに、わたくしのことを気づかってくださる優しさに好感を持っています」
抱きしめる力を緩めたクラリッサの潤んだ瞳がじっとこちらを見つめてくる。言葉もなく見つめあってい

ると、そっと動いた彼女は麻人の唇に自らの唇を押しつけた。
ついばむようなキスを繰り返し、クラリッサが一度離れる。
突然のキスに唖然としている麻人の頬をクラリッサが愛しげに撫でる。
「今の麻人さまに必要なのは、力ではありません。痛々しいほど傷ついたお心の傷を癒やすための治療です。わたくしは麻人さまを慰めてあげたい、癒やしてあげたいのです」
またクラリッサの整った唇が唇に吸いつく。
「素直になってください。わたくしにはさらけだしてください。信じた人に裏切られて悲しかったはずです、悔しかったはずです。その気持ちを口にだすことができなければ、いつかどこかで麻人さまは壊れてしまいます。どうか、わたくしに麻人さまのお心を教えてください」
「俺は……」
すぐに言葉がでてこない。しかし、クラリッサはじっと待ってくれている。
なぜここまでしてくれるのか不思議に思いながら、彼女から伝わる体温と鼓動が麻人に安心感を与えてくれる。そして、ゆっくりと口を開く。
「知らない世界で一人ぼっちで寂しかった。仲間ができたって、イシュタリア人じゃない俺は孤独だった。ずっと元の世界に帰りたかった。戦いなんてしたくない。誰かを傷つけるのだって嫌だ。信頼していた人に裏切られて悔しい以上に、悲しくて心が張り裂けてしまいそうなんだ」
ずっと溜め込んでいた感情を吐露しながら麻人は涙を流す。
「頑張りましたね、麻人さま。もう頑張らなくていいんですよ」
クラリッサは慰めの言葉とともに、額に、頬に、唇にキスを繰り返す。母親が愛しい我が子を労るように何度も繰り返す。
涙を拭いながら、麻人ははじめて唇をついばんでいたクラリッサに自分の意志で応えた。

「――っ」
わずかに驚いたクラリッサだが、キスを止めようとはせず応じてくれた分まで繰り返していく。
次第についばむようなキスに変化が訪れていく。
ぴちゃぴちゃと音を立てて、ときには唇を強く吸いあっていく。
麻人が求めるように舌を伸ばせば、待っていたと言わんばかりにクラリッサは受け入れ二人の舌が音を立てて絡みあう。
唇だけでは収まらず、自然と麻人の腕がクラリッサの肢体を撫でていく。
汗ばみしっとりとした肌の太ももを、腰を、背中と上がっていき、胸にたどり着く。決して大きくはないが、手のひらにぴったり収まる乳房を下着越しに揉むと、電流が走ったようにクラリッサの体が跳ねた。
下着をたくしあげ、露わになった乳房を両手で揉み、ときには乳首をいじっていく。
「……んっ、あっ……気持ちいいですか？」
「柔らかくて温かい、ずっと触っていたいよ」
唾液の交換をやめることなく、息継ぎの間に言葉を交わす。
「わたくしの……んっ、体をっ……お好きに、して、くださいっ」
「本当にいいの？」
「はいっ……後悔はしません。あんっ……わたくしは、麻人さまにぬくもりと、安らぎを感じてほしいのです」
クラリッサの言葉に、麻人は彼女と体を入れ替えるように抱き上げると、ベッドへ押し倒した。
ベッドが大きく軋み、クラリッサに覆いかぶさる形で見つめあう。
お互いに照れくさそうに顔が赤くなっているのがよくわかった。
「麻人さま、あのひとつだけお願いがあります」
「なに？」
「クラリッサとお呼びください」
「クラリッサ……」
「……はい。――んっ、むちゅっ……んっ……」
名を呼び、キスを再開する。

「俺は魔力とか関係なく、クラリッサのことを抱きたい」
「……んっ、あ、はいっ……抱いてくださいっ……わたくしのことを、麻人さまのものにっ……してくださいっ……あんっ」
何度も交わしていた唇を離すと、繋がっていた印だといわんばかりに唾液が糸を引く。
すでに麻人の股間は破裂しそうなほどそそり勃っていて、このままキスと胸に愛撫するだけで達してしまいそうだった。
女性経験が皆無の麻人にとって手探りのキスと愛撫だが、すでにクラリッサの表情は恍惚としており、広げた足の間にある水色の下着の中心には濃いシミが浮かんでいる。
「そんなに見ないでください……その、恥ずかしいです」
「ご、ごめん」
謝りながら下着に手を伸ばす。
クラリッサが羞恥と抵抗からわずかに身をよじるが、本気で嫌がっていないことは麻人にもわかる。
ショーツに手をかけゆっくりと引っ張った。途中、お尻に引っかかるが、クラリッサが腰を浮かせてくれたおかげでするりと脱げた。
「……顔から火がでそうなほど恥ずかしいです」
無毛の割れ目が現れる。両足を開くクラリッサの割れ目は未使用だと思うほど、穢れを知らない一本の線状になっている。
羞恥に耐えきれず両手で顔を隠すクラリッサに愛しさという感情が湧いてくる。
女性特有の甘い体臭にクラクラしながら、クラリッサの細い腰を掴み、顔を秘所に近づけ舌を伸ばし線状の割れ目をなぞる。
「――ひっ……あっ、ん！」
大きくクラリッサの下半身が跳ね、割れ目から透明な蜜があふれだした。
クラリッサは無意識の抵抗なのか麻人の頭を押さえるが、その行為は逆に麻人の顔を自らの秘所に固定してしまうことになる。

下半身が暴れないように、腕を腰から足へ動かししっかりと掴むと、麻人は再び割れ目を舐めはじめた。
「あっ、麻人さまっ――んっ、ああっ、強い、強いですっ……こんなこと、はじめてっ！」
はじめて、という言葉に麻人の興奮は高まり、あふれでる蜜をすくいだすように直接割れ目に舌を挿れて舐め続ける。
じゅるじゅる、と音を立ててクラリッサの愛液を吸いながら、一本線だった割れ目が男を求めるように開いていることに気付く。
早く挿れたいという衝動が麻人を支配するが、それ以上に艶声を上げ続けるクラリッサの反応が愛しく感じてしまい、愛撫する舌を止められない。
舌は割れ目の内側まで侵入し、膣内の壁まで丹念に舐めていく。
「あっ……あっ、あーっ……もう、これ以上んっ、されたらっ……」
何度も浮き上がる腰を押さえながら、舌が割れ目から離れ、割れ目の先端にある肉芽に触れた。刹那、電流が走ったように腰を跳ね上がらせてクラリッサの割れ目から蜜が吹きでた。
大きな反応に驚きながら、クラリッサの気持ちいい場所を見つけた喜びを覚える。
「あ、麻人さま、そこは駄目です！」
慌てたように制止の声を上げるクラリッサを無視して、陰核に吸いついく。コリコリとした割れ目とはまた違う硬さを持つ肉芽を舌で責め続けると、クラリッサの腰が大きく跳ね上がり愛液が吹きだしていく。
「だ、だめっ……やめっ……お願……でちゃう！　でちゃうのぉっ！」
ぷしっ、と音を立てて蜜が勢いよく吹きだされ、張り詰めていた体から力が抜けて一気に弛緩していく。
力なくベッドに足を広げたクラリッサの股間から、ちょろちょろちょろ、と音を立ててシーツに黄色い液体が広がっていく。
快楽によって尿を漏らしてしまったのだと麻人が気付いたときにはすでに遅く、物静かな印象を与えてくれた美しいクラリッサの顔は、よだれと涙と鼻水にま

みれてだらしなく口を開けて意識を飛ばしていた。
「く、クラリッサ？」
美しい女性の痴態に興奮は隠せないが、いささか心配になり体を揺する。
放心したように動かないクラリッサからあふれでる尿の排出が止まると同時に、瞳に理性が戻る。
そして、燃えるように顔を真っ赤にすると、頭を預けていた枕で顔を隠してしまう。
「……クラリッサ・ルルクセン一生の不覚です。もうお嫁にいくことはできません」
「そんな大げさな……大丈夫、可愛かったよ」
「な、ななな、なんてことを！　こんな痴態を晒した女を可愛いなんて……麻人さまは変態です」
「うん。変態でいいよ。ほら、枕をどかして」
顔を隠すクラリッサから枕を奪うと、涙とよだれ、鼻水まで麻人は舌で拭っていく。
「……やっぱり麻人さまは変態です」
伸ばしていた舌にクラリッサの舌が絡みつき、唾液を交換しながら深いキスをする。
唾液の糸を引きながら唇を離すと、クラリッサの視線は麻人の股間に向いていた。
すでに暴発してもおかしくない麻人の逸物はズボン越しにもはっきりとわかるほど興奮の主張をしている。
「あの、わたくしばかり気持ちよくなってしまい申し訳ございません。麻人さまの猛りを、どうぞわたくしをお使いになってお鎮めください」
麻人から体を離し、クラリッサは羞恥で顔を真っ赤に染めながら開いた足の付け根にある秘所を自らの両手で広げ迎えようとする。
これ以上我慢できない麻人は、クラリッサに誘われるままズボンと下着を引きおろし、汗と愛液まみれのシャツも脱ぎ捨て全裸となる。
これから自分の逸物がクラリッサの膣内に入るのだと思うと、興奮が隠しきれない。今までこれほど興奮したことは一度もなかった。
「……麻人さま……きてください」
クラリッサと視線を合わせると、ぎこちないが彼女は微笑んだ。ごくり、とつばを飲み込み、肉棒を支え

愛液に濡れる秘所へ亀頭を押し当てる。
「挿れるよ？」
「――はい。あっ……んんっ」
わずかに漏れるクラリッサの声だけで射精してしまいそうになりながら、必死にこらえて膣内に肉棒を挿れていく。
ぬるぬるした愛液と絡みつく膣壁をかきわける度に快楽の波が襲いかかり腰が抜けそうになる。だが、挿れたばかりで果てるわけにはいかない。
腰を突きだしさらに奥へ奥へと進めていくと、亀頭が膣内で壁のようなものに触れた。
「……はじめてなの？」
「はい。はじめてです」
「はじめる前に聞いておくべきだったよね、ごめん。実は、その、俺もはじめてなんだ。クラリッサみたいな綺麗な人がはじめてなんて、意外だし、なんていうかすごくに嬉しいよ」
言葉にできない感情が麻人の中で暴れている。とりわけ嬉しさが半分以上を占めており、続く感情は愛しさだった。
肉体関係になっただけで愛しく思えてしまう自分の単純さに笑いそうになったが、感情には嘘をつけない。
「わたくしも麻人さまのはじめての相手になることができ、わたくしのはじめてを捧げることができて嬉しいです」
何度目になるかわからないキスを交わす。繰り返す唾液の交換を続けたことで、すっかりクラリッサの味を覚えてしまった。
「どうぞわたくしを麻人さまの女にしてください」
麻人は返事の代わりに、腰をいっそう深く突きだした。
「――ああぅっ、痛っ……ああああっ！　麻人さまが、大きいのが入ってきますっ」
処女膜を肉棒が突き破り、すべてクラリッサの膣内に収まった。
脳が解けてしまいそうなほどの快楽が伝わってくるが、痛みに耐えるクラリッサを見ていると男だけが気持ちいいのは不公平な気がして腰を動かすことができ

ない。
そんな麻人に気付いたのか、涙を浮かべるクラリッサが首へ腕を伸ばしてくる。
「――動いて、くださいっ……わたくしはっ……ああっ、麻人さまにっ……気持ちよくなってほしいのですっ！　わたくしの膣内（なか）をっ、どうぞっ……味わってくださいっ」
「クラリッサっ！」
健気な言葉に、もう我慢はできなかった。
すでに挿入だけで射精感が腰までのぼりつめている。
麻人は何度もクラリッサの名を呼んで、腰を打ちつけ続ける。
「麻人さまっ、麻人さまっ、麻人さまっあああああっ！」
お互いに名を呼びながら、溶けあうような感覚に身を任せていく。
「麻人さまの大きいですっ……わたくしっ、はしたない顔をしていますっ！　はじめてなのにっ……だんだんっ……気持ちよくなってっ」
膣壁が亀頭を絡み締めつけてくる。
くちゃくちゃと愛液が卑猥な音を立てるのを聞きながら、膣壁を肉棒で擦り続ける。
「あっ、ああっ……ああああああっ！　麻人さまっ、麻人さまっ、気持ちいいですっ、――ひぃぐぅっ！」
嬌声を繰り返すクラリッサの声音が変わった。
快楽を味わっているのは同じようだが、快楽の波が大きくなったように体を仰け反らせる。
「奥にっ、奥に当たっていますっ！　赤ちゃんのお部屋に、麻人さまが届いていますっ！」
赤ちゃんのお部屋、の言葉の指す場所が子宮だとわかった麻人は、さらなる興奮と快楽に身を任せて腰を動かし奥の奥を突き続ける。
よだれを垂らし力なく口を開けているクラリッサの唾液を吸いながら、子宮口をえぐるように亀頭を膣内に押し挿れていく。
何度もこらえてきた射精感がまたしてもこみ上げてくる。このまま続けたい欲望はあるが、クラリッサの膣内に射精したいという願望も強くなっている。

「――もうっ、射精(で)そうだクラリッサ！」
「だひてっ！　……だひてくださしゃい麻人しゃまっ！　……麻人しゃまのせーしでわたくひの赤ちゃんのお部屋をぱんぱんにしてくだしゃいっ」
クラリッサのお願いに応えるように、麻人はラストスパートをかける。
無我夢中で腰を打ちつけ、限界がくるそのときまでクラリッサの膣内を感じ続けようとする。
そして、
「でるっ！　射精(で)るよっ、クラリッサっ！」
「だひてっ！　だひてくしゃいっ、麻人しゃまぁっ！」
肉棒を膣内の奥へ突き入れ、亀頭が子宮口をえぐる。
刹那、堪えていた射精感が一気に開放された。
――びゅるるるっ！　びゅるっ！　びゅるるるるるっ！
クラリッサの子宮めがけて大量の精子が放たれていく。
股間から脳まで電気を流されたような快感が襲いかかり、射精は止まる気配を見せない。
溜まりに溜まっていた精子をクラリッサの子宮へ何度も繰り返し吐き続けながら、亀頭を子宮口に押し当ててさらなる快楽を味わう。
腰を浮かし痙攣するクラリッサの股間から再び尿が溢れてくるが、尿の温かさが射精感を誘発させ二度目になる精子が子宮に放たれた。
ようやく射精を終わり、息を切らせた麻人は覆いかぶさるようにクラリッサの上に倒れていく。
「あしゃとしゃま……」
快楽で意識を飛ばし呂律が回らないながらも、麻人の名を呼び抱きしめてくれるクラリッサの体温を感じながら、ゆっくりとまぶたが重くなっていくのを感じる。
「クラリッサ……ありがとう」
感謝の言葉とともにクラリッサの肌にキスをすると、彼女の匂いと体温に包まれて深い眠りに落ちていくのだった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売)／FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

http://ktcom.jp/